

新潟医療福祉大学言語発達支援センター活動報告—臨床研究の展開について—

新潟医療福祉大学言語聴覚学科・吉岡 豊, 山岸達弥  
渡辺時生, 石本 豪

【背景】

本センターが開設されて4年目をむかえ、いくつかの知見も蓄積されてきている。本報告では訓練過程を前言語、音声言語、文字言語の3つの領域に区分して、臨床の過程で明らかになったことを報告する。

【前言語期の訓練】

ことばによるやりとりが困難である例では、それ以前に対人的なやりとりの成立が最初の目標となることが多い。ここではことばによるやりとりができない多動児の行動変化についてまとめた。

対象は初診時4;11の多動性障害の女児であった。初回評価時では着席することは一切なく、常同行動や奇声、テーブルに上がるような多動が著明であった。本児に対して行動観察による全体発達の評価などを行いながら、本児と体験共有すること（一緒に行動をする）を中心に週1回の頻度で訓練を実施（ビデオ録画）した。図1は対人的相互交渉の変化を示したものである。この図から、動作による対人的な関わり行動が先行しかつ頻度も高いことがわかる<sup>1)</sup>。現在では、訓練の時間中は着席して課題を実施することが可能となっているが、音声言語を用いた課題を実施するまでには至っていない。

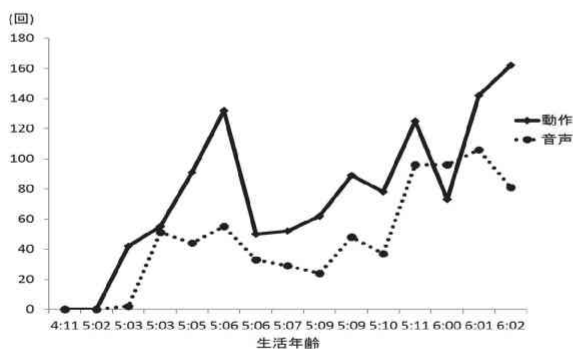


図1. 対人的相互交渉の変化

【音声言語力について】

音声言語面、特に語彙力の面については、広汎性発達障害児とそれ以外の言語障害児とではやや趣を異にする傾向が認められた<sup>2)</sup>。対象は広汎性発達障害児（PDD）21例と非広汎性発達障害児（非PDD）11例（知的障害が大半）であった。彼らに対して、絵画語い発達検査（理解語彙年齢を算出）と田研式言語発達診断検査のI. 語彙検査（表出語彙年齢の算出）を実施した。その結果を表1に示した。全ての群で生活年齢よりも語彙年齢は有意に低かったが、表出優位PDD群の

表出語彙年齢が有意に高い傾向にあった。なお、理解語彙年齢よりも表出語彙年齢が高いPDD13例では、表出語彙年齢が有意に高かった。

表1. PDD例と非PDD例における生活年齢と語彙年齢の比較

	生活年齢	理解年齢	表出年齢
表出優位PDD	5;3(0;8)	2;11(1;0)	4;2(0;10)
理解優位PDD	5;6(1;4)	3;6(1;9)	2;6(1;6)
非PDD	5;6(2;6)	3;0(1;7)	3;0(2;0)

【文字言語に関する訓練】

言葉に遅れのある子どもたちも就学すると、文字習得が次の課題に挙げられてくる。仮名文字の獲得（音読、読解）が困難であった知的障害児1例を対象に仮名文字獲得訓練を行った。対象は仮名文字訓練開始時6;3の女児であった。本例を対象に仮名1文字の理解、音読訓練、その後には仮名单語の読解、音読訓練を実施した。ここでは仮名1文字の結果を図2に示した。この図から、数概念が5以上わかるようになると、仮名1文字の音読・読解が可能となっているのがわかる。また、仮名单語レベルではまず音読が可能となってから読解が可能となっていく傾向が認められた<sup>3)</sup>。

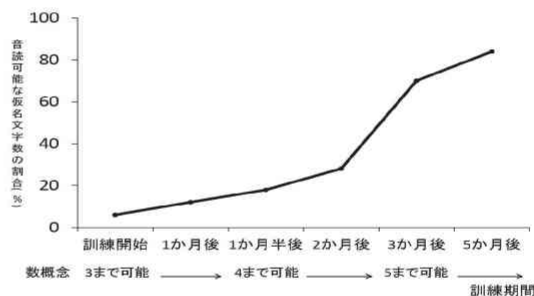


図2. 数概念と仮名1文字の成績の関係

【結論】

言語発達支援センターにおける臨床から訓練の手がかりとなる知見を紹介した。1) 対人的なかわり行動は動作によるかわりが先行する、2) PDD児には、語彙レベルにおいて表出能力が高くなる例が存在する、3) 仮名文字の獲得には数概念の確立が必要であり、単語レベルでは音読が読解に先行する傾向にあった。

【文献】

- 1) 遠藤まい, 吉岡豊: 多動性障害児1例の行動変容過程—行動評価による検討—. 新潟医療福祉学会, 14(1): 40, 2014.
- 2) 吉岡豊: 言語発達障害児の語彙力について. 日本発達障害支援システム研究, 13: 13-19, 2014.
- 3) 長沼育実, 吉岡豊: 知的障害を伴う言語発達障害児における仮名文字訓練. 新潟医療福祉学会誌, 14(1): 38, 2014.